50 年後の危機に備えよう！

20 年後、30 年後、50 年後、日本はどうなっているでしょうか。少なくとも見通せる範囲、高齢化社会は峠を越しているものの、しかし、少子化、あるいはその影響は続いていることでしょう。一方、エネルギー事情はどうでしょうか。国際関係はどうなっているでしょうか。

水資源は中国大陸をはじめ、逼迫の度を強めているはずです。温暖化は進み、台風、集中豪雨は今以上に過酷な影響を地上にもたらしているはずです。食糧問題は、オーストラリアやアメリカ大陸を始め、天候不良で不作、輸出のストップ、価格の高騰、国内では飢饉もありえます。

まことに予測不可能な時代に入ってきました。そのいずれも起こってほしくないですが、危機対応として、今からやれることは何でもやっておきたい気持ちです。

そこで、提案です。

Ⅰ．　堤防に実のなる木を育てよう！

あなたがお住まいの町を思い浮かべてください。少なくとも、5 本やそこらの川が、海に向かって流れているでしょう。博多湾に注ぐ川だけでも、多々良川、御笠川、那珂川、樋川、室見川、瑞梅寺川、などが思い浮かぶように、たくさん候補の河川はあります。都市河川はせせこましく難しいかもしれませんが、一歩郊外にでるとふさわしい堤の川が多々あります。

その堤防に、食糧になる実やエネルギーを蓄えた実をつける植物を植えましょう。たとえばハゼの木です。

「今年の明りは、昨年の太陽だった」。

この言葉は、江戸時代、太陽エネルギーの恵みで実ったハゼの実を採集して、それから作った蝋燭が、翌年の夜の明かりとなったことを指しています。伝統職人は今も福岡県で作っておいでです（ハゼの実はもっとほしいとのこと）。

水力発電でランプが不要となり、蝋燭も石油から作られるパラフィンから製造されるようになりましたが、石油だってどうなるかわかりません。蝋燭は、国内生産で自給できる貴重な資源になるのですから、その意味でも埋蔵エネルギーに頼るシステムから可能な限り、太陽エネルギー活用の方法を模索すべきだと思います。

●　四季の彩を川沿いに

河川ごとに植物の名前をつけます。はぜの木川、桜川、イチョウ川……。かねては、新緑、緑陰、紅葉、落葉、といった風情を楽しみ、秋になると収穫し、加工業者に引き取られていきます。堤防管理のためとはいえ、殺風景な堤防を潤いのあるふるさとの川にする

意味は大きいと思います。

米、野菜など一年物以外の植物で、役立つ樹木としては、柿、柑橘類、ビワ、リンゴなどです。オリーブなど輸入代替作物もいいと思われます。その手法は、河川管理上問題のない場所や方法を選び、市民を加えて、植栽や管理の方法等を決めていきますが、それは原則さえ確立されれば困難なことはないように思えます。

Ⅱ．国産材の建築奨励策

昭和 25 年から 45 年の 20 年間にかけて、膨大な針葉樹の人口林を造成しました。いまや建築適齢期となっています。一方で、膨大な間伐材の必要が迫られて、人手その他で困っています。これを計画的に伐採し、自然林に近い植生とし、その際、Ⅰ．で述べた考えかたを取り入れた食糧やエネルギーに役立つ樹木を植えていきます。そのほか、いざというときに、ゴルフ場を芋畑に変える方法を、自治体と経営者があらかじめ協定を結んでおくことなども必要と思います。

終わりに

わが国も世界も変化は急激です。できるだけの遠望をして、あらゆる危機を念頭において、対処しておくことは大切なことと思っています。